

新岡垣風土記

第441回

ミャンマー（ビルマ）と岡垣⑤

岡垣歴史文化研究会 入江 東樹

〈ビルマ戦での軍医〉

戦争が始まると、戦地に出かけるのは将兵だけでなく、軍医や衛生兵、従軍看護婦、従軍慰安婦らもいた。ここでは、軍医のことだけを紹介したい。

作家の帚木蓬生はらきぼんせいの著書に、『蝨の航跡』と『蠅の帝国』がある。2冊とも副題が「軍医たちの黙示録」となっていて、軍医30人の活動の様子を書いている。

『蝨の航跡』の「あとがき」で、「……将兵の赴くところ、必ず軍医もいた。戦地での多くは武器弾薬が尽き、多数の死者がいたが、それは病魔と飢餓うへだった。軍医には医療器具や医薬品がなくなっていたが、音を上げる事はできなかつた。……」と書いている。

ビルマ戦にも、軍医がいた。『蝨の航跡』の中で、ビルマ戦のインパール作戦での軍医の活動の様子が書かれているが、ここでは、紹

介する紙面の余裕がない。

〈秋武亮軍医のこと〉

筆者は7年前、亮さんの長男である達さんとお会いする機会があった。そして、亮さんのことをいろいろと教えてもらった。

亮さんは、門司市（現北九州門司区）で生まれた。昭和10（1935）年、九州大学医学部を卒業し、翌年、結婚された。

昭和12（1937）年、小倉陸軍病院に勤務中、軍隊に入隊し、予備役衛生兵として従軍した。亮さんは従軍記を書かれていたので、そのごく一部を紹介する。

1942年2月15日門司港から、那古丸（7100トン）でビルマへ。

3月25日、ラングーン（ビルマ）着。同28日、列車でトングーに向かった。途中から、乗馬となり、トングーに着いた。

4月9日、連日の戦闘や強行軍のため、落後者が増えた。糧食の補給もままならぬ。進軍は無理と思うが、これが戦争なのか。

同29日、ラシオに着いた。翌日は英印軍との戦闘になり、わが軍の死者多数。

5月4日、北ビルマのミートキーナに着いたが、同28日、今度は南下することになった。

同31日、ナンカンに着いた。ここで、自分はDengue（熱帯性伝染病）に罹り、ラシオに後送（戦地を離れ後方に移ること）された。

8月2日、メイミョウの病院に移り、綾部軍医中尉の診断を受けた。宮崎の人で、なかなか親切な医者だった。それに、父親同士が長崎大学医学部で同期だったことが分かった。

同7日、ラングーンへ後送され、さらには、シンガポールで治療を受けることになり、同27日に乗船することが決まった。

日記は、ここで終わっている。亮さんは9月12日、シンガポールの病院で死亡された。31歳だった。門司に妻と子供3人、祖母が残された。

昭和19（1944）年、残された家族は糠塚（岡垣）の加藤病院（かつて秋武家はここで開業されていた）へ疎開された。6年間の疎開生活を送られた。

秋武家の本籍地は糠塚68番地で、先祖累代の墓地もある。疎開先が糠塚だったせいか、岡垣の戦没者名簿に、秋武亮さんの名が記されている。

つづく

